

臭い話

児玉 寛嗣

自宅から徒歩で十分ほどのところに「三河島水再生センター」という都の施設がある。そこでは千代田区、文京区、台東区、荒川区などの下水処理を行っている。

この施設は日本で最初の下水処理場として一九二二年に作られ、今年で百年目を迎えた。建設当時のポンプ設備は国の重要文化財となっている。

施設が建設される前から既に水洗トイレはあったが、排水は川に流されていた。生活の近代化で水洗トイレも広まり、川に流されるし尿も増え、疫病の発生など衛生面で問題が生じていた。設備が出来ても下水管はなかったので、し尿は自動車で運ばれ処理された。

一方、水洗の普及率はまだまだ低く、一般家庭では汲み取り業者が収集し海に投棄する時代が長く続いた。

化学肥料のなかった頃、し尿は貴重な肥料で、野菜と交換して農民が持ち帰っていた。明治初期に日本を訪れたあるイギリス人がし尿を肥料として使う日本のやり方を賞賛すると書いてあるのを読んだことがある。欧米ではし尿を肥料にする習慣はなく、破棄された。当時のロンドンも下水処理施設がようやくでき出した頃であり、し尿は川などに垂れ流しており、不衛生極まりの無いものだった。

食べる ↓ 排便する ↓ 食べる という人間の営みは、最も単純な循環サイクルであり、し尿を肥料として使うという発想は究極のリサイクル利用である。

かつて、江戸の町にはし尿を買い取り農家に売る業者もいた。し尿には価格にランクがあり、大名屋敷や花街の吉原から出るものは高く売れたそうである。察するにこれらの住人は旨いものを食っているので出すものも肥料としての価値が高いとふんだのだろう。一方、監獄から出るものは買い手もなく川に捨てられていた。

最近、下水道資源を農業に利用しようという動きがある。具体的には下水から得られる汚泥を肥料として活用するもので実用化も進められている。化学肥料の製造には多くのエネルギーが使われている。汚泥の活用はエネルギー資源の節約にも繋がる。